



アウディの軌跡それは挑戦の歴史

皆さんはアウディにどんなイメージを抱いているだろう。スタイリッシュとか都会的といったファッション性を筆頭に挙げる方が少なくないと思う。

でも、そんなブランドイメージが定着したのは90年代に入ってからなのだ。では、それまでのアウディは……。

そう、意外と知られていないのである。「TRUE AUDI」は、真の魅力をあらゆる角度から解き明かしていく連載企画。

まずは2回にわたり、激動のヒストリーを紐解きながら、その系譜をじっくり予習するでしょう。

クルマ好きの方ならご存じのとおり、アウディの前身は世界大恐慌の荒波を乗り切るために、ドイツ・ザクセン地方の自動車メーカー「DKW」「アウディ」「ヴァンダラー」「ホルヒ」が結成した一大コンツェルン「アウトウニオン」だ。それは1932年のことだった。現在も使われている4つの輪をモチーフにしたエンブレムはこの4つの企業を意味している。中心的な存在になったのは、小型大衆車の分野ですでに成功を収めていたDKWである。最初にリリースされたのは、DKW F1 500 (490cc)とF2 600 (584cc)。両者とも2サイクル・エンジンを搭載して前輪を駆動する小型車だ。

ところで、いまでこそ小型車は前輪駆動が常識となっているものの、当時としては先進的、というか挑戦的なシステムであったことは

言うまでもない。オンロードにフルタイム4WDを持ち込んだ先駆者として知られるアウディだが、実は前輪駆動のパイオニアでもあるのだ。4つの企業を結びつけるための「接着剤」になったのは、時代に立ち向かう「挑戦する姿勢」という思想だったのかもしれない。



奇跡の復活

世界大恐慌を乗り切ったアウトウニオンをまたしても時代の波が襲う。第二次世界大戦である。敗戦後、ザクセン地方は東ドイツの管轄下に置かれたため、すべての工場を共産側に奪われてしまう。普通ならこれで終焉……、ところが彼らはあきらめなかった。人的資源の一部は西ドイツ側にも残ったため、その英知を集集して、またしても新たな挑戦を始めたのである。デュッセルドルフに新工場を建設して、DKW F89 (水冷2気筒2サイクルエンジン+前輪駆動)の生産に取りかかったのだ。そして1956年には、国内で第5位の生産台数を誇るメーカーへ

と奇跡の発展を遂げる。

ところが、DKWは1960年をピークに販売台数が急速に落ち込んでいく。そう、2サイクル・エンジン時代の終焉である。だが、ここでも「挑戦する姿勢」が窮地を救う。DKWというブランド名を捨て去り、アウディの名で4サイクルのF103をリリースしたのだ。1966年にはF103が1.7リッター直4のアウディ80、90psのアウディ90に進化する。さらに、小型車の60や75、アッパーミドルクラスの100系列もデビューしている。ちなみに、車名の数字は馬力を意味していた。

第2世代のアウディ80が登場したのは1972年のこと。このモデルにも先進的な技術が採用されていたことを忘れてはならない。ネガティブ・オフセットという新しい前輪のジオメトリーを実用化した最初のクルマだったのだ。アウディ80は、リファインを重ねながら完成度を向上させ、中核モデルのA4へと成長していく。4サイクル・エンジンを開発して、新たにアウディ・ブランドを立ち上げたのは、いまから僅か40数年前。まさに奇跡の復活劇だったと言える。

クワトロの源流

さて、いまやアウディの象徴とも言えるクワトロシステムの源流はどこにあるのか？ それは同社がひとりのエンジニアを招き入れたことから始まる。フェルディナント・ポルシェを祖父に持つ、フェルディナント・ピエヒである。彼の強烈な個性と類い希な才能がなければ、革新的なスポーツカー“アウディ・クワトロ”は生まれなかった

だろう。また、アウディに「挑戦」という思想がなければ、彼の斬新なアイデアは却下されていたのかもしれない。

1980年のジュネーブショーで発表されたアウディ・クワトロは、一般的なパートタイムではなくセンターデフを備えたフルタイム4WD (クワトロシステム)を採用していたことが最大のトピック。これはオンロードを速く、そして安全に走るためにピエヒが開発したシステムで、2.1リッター直5ターボの叩き出す強大なパワーを無駄なく路面に伝えることを使命としている。アウディ・クワトロはレースシーンも席巻、以後WRC (世界ラリー選手権)に出場するマシンの駆動方式は4WDが常識になってしまった。アウディ・クワトロは日本でも話題となり、市場での勢力を飛躍的に拡大させる立役者となった。アウディ・イコール・スポーティというイメージは、このときに確立されたと言っていいだろう。そして、クワトロシステムは80や90、200などのセダンやアバントにも採用され、その流れは現代のA4やA6などに続くのである。

今回は80年代までのアウディ史を駆け足で紹介してきた。同社の経営は決して順風満帆だったわけではなく、むしろピンチの連続だったのだ。アウディは、その窮地を乗り切るために、困難なことに真正面から挑む姿勢と革新的なアイデアを現実にする技術力を身につけていっ

たのである。「挑戦する姿勢」というスピリッツが不可能を可能にしたのかもしれない。アウディのクルマには、どのモデルにもこのDNAが宿っているのだ。

次回は、A4やA6、A8、TTなどを中心に、90～2000年代に登場したモデルをご紹介しながら、その足跡を追ってみたい。

TEXT：野田義彦



初代アウディ80
1966年にリリースされたアウディ80は現行型A4の源流となるモデル。そして、新生アウディが世界屈指の自動車メーカーに成長するための基幹となった。80の名は1.7リッター直4ユニットが叩き出す80psを意味している。



4代目アウディ100
1990年にデビューを果たした4代目のアウディ100。アウディ初のV6ユニット (2.8リッター)が搭載された。後にこのエンジンは4代目の80にも積まれることになる。そして、80や100などのセダンは、90年代中盤にA4やA6、A8に進化していく。



アウディ・クワトロ
アウディの名とその高い技術力を世界に知らしめた4WDスポーツカーの先駆者。デビューは1980年のジュネーブショーだった。搭載される2.1リッター直5SOHCターボ・ユニットは200ps/29.1mkgfのパワーとトルクを叩き出す。WRC (世界ラリー選手権)でも輝かしい成績を残した。以後アウディは、このセンターデフ内蔵のフルタイム4WDを80や90などのセダンにも展開していく。

